国立人口問題研究所

『フランスワ・ケネーとフィジオクラシ』

L'Institut National d'Études Démographiques, *François Quesnay et la Physiocratie*, I. II. Paris, I. N. E. D. et P. U. F., 1958, xx, 1005 p.

1958年はQuesnayの『経済表』公刊200年の記念の年であった。上記研究所は「デモグラフィの偉大な古典の再刊」(xiii)という1945年の創設以来の研究活動の1つの目標にそって，「天才的経済学者，人口統計家，医者，哲学者の諸著作を再刊することを企図し」，「それらを註解するためにすぐれた専門研究家の(国際的)協力」(xiv)を求めた。1958年6月Quesnayの生地メレおよびパリにおける国際的記念学術集会の際に発表された本書がそれである[1]。本書はI部：序文・諸研究・伝記・文献目録(xx, 392 pp.)，II部：註つきテクスト集(393—1005 pp.)の2部からなる。I部の構成は——：

François Quesnayの胸像(写真)，……Vassé作
〔1〕序文，……Luigi Einaudi (12 p.)
〔2〕紹介，……Alfred Sauvy (8 p.)
〔3〕《Physiocratie》の刊年について，
……Luigi Einaudi (9 p.)
〔4〕Quesnayの人口思想，……Adolphe Landry (39 p.)
〔5〕docteur Quesnayのデモグラフィックな空想，
……Jules Conan (4 p.)
〔6〕哲学者，経験論者，経済学者 Quesnay，
……J.-J. Spengler (20 p.)
〔7〕François Quesnayの国民経済会計の体系，
……Jean Molinier[2] (30 p.)
〔8〕MarxとQuesnay，……Jean Bénard (26 p.)
〔9〕Physiocrateたちのproduit net，
……Louis Salleron (22 p.)
〔10〕François Quesnayの『経済表』のメカニスム，
……Henri Woog[3] (16 p.)
〔11〕Malebrancheの弟子，Quesnay，
……久保田明光[4] (28 p.)
〔12〕Quesnayと医学，……Dr Jean Sutter (17 p.)
〔13〕François Quesnayの生涯，
……Jacqueline Hecht (84 p.)
〔14〕附録，QuesnayのForbonnaisあて書簡2通，(6p.)
〔15〕François Quesnayの著作年譜，……(16 p.)
〔16〕François Quesnayにかんする伝記的，医学的，経済学的主要著書および論文，Jacqueline Hechtによる註つき文献一覧 ……(76 p.)

元イタリア共和国大統領，Einaudi氏は[1]でQuesnayの思想中「今日なお生きている主概念」は「永続的循環」(input-output)と「produit netの概念」(Marxの剰余価値)であり，「土地単税」や「自然秩序」の概念は「誤り」ではあるが，「理論の有効性」においてではなく，「推論方法」の問題として「昨今の経済的諸問題の解決がそこに求められるべき道を示している」とのべ，「physiocrateたちがわれわれに残した」「永遠の価値をもつメッセージ」の研究を呼びかけている。同氏は，さらに[3]でQuesnay著作集*Physiocratie*の刊年(Tom. I. 1768; Tom. II. 1767.)の疑問を解くため詳細な追求を試み，結局『東京商科大学所蔵Carl Menger文庫目録』(1926)中のPékin, 1767年版の存在を手がかりとして初版1767年と結論している。Landry氏[4]はQuesnayのanti-populationnisteとしての人口思想と彼のproduit netの概念にもとずくフェルミェによる大農法の体系との関連を諸著作を通じて考察し，それをanti-mercantiliste Quesnayの「*anormale*な情況」のもとで理解する。氏はさらにCantillonの人口思想と比較し，Cantillonが「*normale*な設定」(土地所有者中心の現実反映)のもとでの「純理論家」であるのに対してQuesnayは「*anormale*な情況」のもとでの「なによりも改革者」であったと説明している(p. 49)。この論文は49年前の旧稿[5]の再録である。Quesnayの人口思想がanti-populationnisteの色彩を強くもっていたことは明らかであるが，富と人口の関係，人口増加の限界についてのQuesnayの答えはあいまいである。Conan氏[5]はこの問題にかんするQuesnayの未発表手稿(執筆年不明)を発表している。それによればQuesnayは「富の継続的増大が急速に収益と人口の発展を促進し得ると同様に，また富の継続的減少はやがて人口と収益の減少をひきおこし得る」(p. 54)と考えていた。このQuesnayのpopulationnisteの見解について，Conan氏はこの手稿が今日まで未発表であった推定理由と関連して「Quesnay自身おそらく彼の理論的計算が彼を導いた意外な結果に半ば自信がなかったのであろう」(p. 52)と説明して

---

1) 記念論文としては本誌9巻4号の記念特集以外に，つぎのものがみられる。

Revue d'Histoire Economique et Sociale (XXXVe Vol., 1957, No. 4; XXXVIe Vol., 1958, No. 1.)の特集号 "Problèmes économiques au XVIIIe siècle" (I), (II).

Gaston Leduc, "Le deuxième centenaire du Tableau économique (1758—1958)", *Revue politique et parlementaire*, Mai, 1958.

Н. Цаголов, 《Экономическая Таблица》Кенэ и ее значение (К 200-летию《Экономической Таблицы》), 《Вопросы экономики》, 1958—12.

2, 3, 4) [7]については，久保田明光「ケネー『経済表』の発展——その循環図式の近代理論的展開——」『経済研究』9巻4号の紹介が詳しい。[10]はH. Woog, *The Tableau économique of François Quesnay*, 1950の要約である。[11]は久保田明光，『ケネー研究』，昭和30年，第2章ケネーに於ける物理的世界と倫理的世界への序説——その哲学思想の偶因論的構造について——の要約を仏訳したものである。

5) "Les idées de Quesnay sur la population", *Revue d'Histoire des Doctrines Economiques et Sociales*, 1909.

いる。Spengler 氏[6]は Quesnay の「方法論の諸問題」に重点をおき，Quesnay の学派が「彼の諸著作に好んでヨリ演繹的，ヨリ合理主義的性格を与えた」が，Quesnay は「彼の経済分析においては経験的かつ帰納的表現を用いていること」，「彼の理論的モデルすら……具体的世界ときわめて近く隣りあっている」ことに注意を促して，認識論的基礎から生産—収益理論，競争と配分のメカニスム，循環と巨視的経済均衡，分配理論，経済発展，諸階級間の調和と社会的福祉，国家の役割にいたるまでの Quesnay の諸概念を解説的に検討している。Bénard 氏[8]は Quesnay と Marx の「調停を試みることは私見では無益であろうし，まして綜合は不自然である」(p. 105)，両者の関係にかんする「解答は Marx が意識的に若干のフィジオクラート的概念を用いた方法の研究からのみ生じ得る」(p. 107) とのべ，Marx の再生産表式の展開を詳細に解説している。Salleron 氏[9]は Turgot の produit net の概念を (1) *l'éonomie naturelle*(自然のおくりもの)，(2) *l'éonomie financière*((1)に対応する貨幣利得)，(3) *l'économie politique*(耕地使用許可の価格としての地代」(p. 147) の 3 つに分け，Turgot の produit net の概念における諸矛盾を彼の発展史的観点で理解しようとする。Sutter 氏[12]は地方の産科医 Quesnay から外科医学論争や Harvey の発見，Boerhaave の医学論の影響等をへて *Essai physique* 第 2 版の刊行までを歴史的にあとづけ，医学史上の「Quesnay の功績は医学の実際家的面をめざましく分析したこととその実践である」とし，「*Essai physique* とその序論」を「Descartes と Claude Bérnard の間の重要な中継地」(p. 207) と位置づけている。Hecht 氏は Oncken 以後の新資料の発見や研究の成果にもとずき，[13, 15] で Quesnay の生涯と著作にかんする的確な展望をあたえるために，通説・伝説の誤りや疑点を詳細に検討し指摘している。たとえば Schelle にしたがって Quesnay の出身にかんする女婿 Hévin による「伝説」を否定し，誤って Quesnay に帰せられた著作を根拠をあげて否定し，Weulersse にしたがって『農業哲学』第 7 章を著作年譜にいれている。[13]はこれまでのもっとも詳細な伝記的研究となり，[15]は Oncken 版著作集末尾の著作年譜の不備を十分に補っておなじくこれまでのもっとも詳細なものとなっている。しかし『経済表』にかんする記述は簡単であり，説明なしに従来の説と異っている。ここでは『経済表の説明』は第 2 版にはなく，第 3 版ではじめて加えられることになっており (p. 261, 308, 675 note 1)，British Economic Association による『経済表』の複製は「欄外註なしの第 3 版経済表の複製とその説明，および欄外註つき第 2 版経済表の複製と《シュリ氏王国経済の抜粋》」をふくむことになっている (p. 337)。[16]はフランスはもとよりイギリス，ドイツ，イタリア，ロシア，ポーランド，スカンディナヴィア諸国および日本の諸国語による総数 320 点以上の文献を伝記，医学，経済学(政治学・哲学をふくむ)の 3 分野に分けて整理し，それぞれに内容紹介のコメントを附している。それは，これまで発表された限りではもっとも詳細で・ていねいな研究案内となっており，本書を特色あるものとしている。

II 部は主として経済学上のテクスト集である。Oncken 版『経済学・哲学著作集』の「I. 伝記的文献」はもちろん，「III. 哲学的諸著作」の『明証』以外は省略され，「II. 経済学的諸著作」中 Dupont の手になるものは省略されている。Oncken 版に収録されなかったものでは『人間』，『租税』，『経済表』第 1 版草稿と第 2 版の写真および『表』第 1 版の欄外註のテクスト，「シュリ氏王国経済の抜粋』，『経済表の説明』，『農業哲学』の第 7 章，『エフェメリード誌の著者への書簡』が新たに収録され，新発見資料 *Aspect de la psychologie* が発表されている。これは，「魂は感知する特性をもつ実体である」(p. 683) という総タイトルにはじまり，5 部からなる表の形式で 1760 年 3 月に印刷されたもので，紛失された論文 *Fonctions de l'âme* の執筆のために作られたプランか，あるいは逆にその後に作られたレジュメであると推定され，「『明証』論との類似」が指摘されている。そしてこれが「表の形で表現されていることは Quesnay が経済学でない問題にたいしても表を重視していたことを示している」(p. 683, note 1) と註記されている。難点をあげれば「『シナの専制主義』のはじめの部分」(chap. I—VII) と「哲学的諸著作」の省略の適否はいちおう別としても，厳密には「経済学上のテクストは，すべて再録された」とはいえない。たとえば『経済表，第 1 版草稿』は表の欄外の註だけ収録され，『抜粋』の基本となる『国民年収入の分配の変化についての注意』は写真だけであり——全容は坂田教授の訳書『ケネー　経済表』，昭和 31 年にはじめて発表された——，『抜粋』は『第 2 版』のものだけであり，この諸版の異同にかんする限り註は詳細でない。しかし本書は Oncken 版以後はじめての著作集であり，それを「註解するため」の論文集である。したがって本書から特別な研究方向を抜きだすことはできないが，Quesnay の歴史的業績がさまざまな角度から検討されており，さきにのべた *Revue d'Histoire Economique et Sociale* の 2 号にわたる特集『18 世紀の経済学的諸問題』でのきわめて歴史的・資料的・内在的・ヨリ広範な研究諸論文と合わせて，われわれはこの両者によって Quesnay および「18 世紀の経済学諸問題」にかんするさまざまな展望を持ち得るし，Einaudi 氏のことばにしたがえば，「われわれはやっと分析の端緒についたにすぎないという事実」(v) の反省をたえず求められるのである。

(津田内匠)